

その小さな生命体がこの世に産み落とされた瞬間から私は『お姉ちゃん』になった。

2つ歳の離れた妹。思い出と呼べる記憶の中にはいつだってその小さな背中がある。人見知りで恥ずかしがり屋。それなのにいつも、どこに行くにしても。懸命にその短い脚を駆使して私の後ろを小走りで着いてきた。

転んだ時、お気に入りのおもちゃが壊れた時、ジュースを溢してしまった時。咄嗟にその唇から紡がれるのはいつだってお母さん、でもお父さん、でもなく私の名前だった。

「おねえちゃああん」

とそう涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を私に力一杯押し付けてくる妹。すぐに泣いて、手の焼ける。そんな妹のことが私は、可愛くて仕方がなかった。

二十歳を優に超えた今でも、その気持ちは変わっていない。

両親が共働きということもあり、幼少期から私と妹は2人で過ごすことが多かった。初めて好きになった人のこと、学校で友達と喧嘩しちゃったこと、授業で先生に褒められたこと、様々な話を聞いてきた。逆上がりの練習やハロウインの仮装の準備、夏休みの最終日に宿題を手伝ったこともあった。手元のアルバムに目を向けながら、私は小さく頬を緩める。

お姫様役が良かったと直前まで頬を膨らませていた幼稚園の劇の発表会。初めて積もった雪に2人で大はしゃぎして霜焼けを作って怒られた。ああ、これは父の為に一緒に作ったバレンタインのチョコレートの写真だ。市販の板チョコを湯煎で溶かして固めただけのチョコレート。それなのに父が天才だ！なんて褒めるから、妹は暫くの間、何かあるその度にまたチョコレート作ろうか？と得意げに言っていた。

懐かしいなとそう思いながらべらり、ゆっくりと捲った次のページに、あ、と思わず声が溢れ出た。

そこにあるのはピントのブレた1枚の写真。満面の笑みを浮かべている妹の口には小さな穴が空いている。

これは妹の乳歯が、初めて抜け落ちた時の写真。そして私が生まれて初めて、撮影した写真でもある。

昔から家を空ける機会が多かった両親は、小学校に上がるタイミングで私に携帯電話を授けた。『もう家に着いた？』『歯は磨きましたか？』など。会えない時間はメールを通じて両親とコミュニケーションを図るのが、私たち姉妹の習慣だった。

鳴り響いたメールの受信音。見慣れた『今何してる？』の文面に、2人でテレビを観ているとそう文字を打ち込もうとした瞬間

「おねえちゃん、これ見てー！」

なんて呑気な声と共にその空洞が向けられた。差し伸べられた手の平の上には小さな白の塊。そう言えば少し前から下の歯がグラグラしていて気になる、とぼやいていたのを思い

出す。

手の中の携帯電話とはしゃぐ妹へ交互に目を向けた私は

「取れたー！」

とそう無邪気に笑う妹の様子を、咄嗟に画面へと収めたのであった。

そっと、その写真を優しく指で撫でる。

この日を境に、私は写真という形で日常を切り取るということを覚えた。

メールに写真を添付して送り付けた私に、両親は帰宅しての一番ありがとうとそう感謝の言葉を告げた。そして、よく撮れている、と天才だ！と口にして私の頭を撫で回した。嬉しかった。そう、当時の私にとってはそれがとても、嬉しかったのだ。

家の近くの桜並木。道端で見つけたたんぽぽ。夏休みの間、預けられていた祖父母の家で収穫した様々な野菜。大きな向日葵を見上げ、尻餅をついた妹。大吉のおみくじ。初めて食べた林檎飴。花火の音に驚いて泣き出した妹とそんな妹を宥める困り顔の祖父。あの音やっつけてきて！と無茶を言う妹に益々慌てる祖父を見て私と祖母は顔を見合わせて、笑った。綺麗に赤く染まった紅葉。家の近くの公園でポケットいっぱいにどんぐりを詰める妹。商店街のイルミネーション。白くなった窓硝子と一緒に指で描いた落書き。穴の空いた手袋。炬燵でうたた寝する妹。アルバムを埋める、沢山の思い出たち。

キッズ携帯からガラパコス携帯、ガラパコス携帯からスマートフォンと時代と共に形を変えていった端末の全てに、私の手によって切り取られた日常が、妹との日々が詰まっている。両親が喜んでくれたから、褒めてもらえて嬉しかったから。そんなきっかけで始まった習慣だったが、今ではすっかり私の趣味だ。

アルバムを捲るにつれて少しずつ綺麗になっていく画質。こうして見返すと凝り始めた画角や加工の仕様が写真1枚1枚に顕著に現れていて少しだけ、恥ずかしい。小さく頬を掻きながら手の中のアルバムをぱたんと閉じて、ゆっくりと腕を伸ばした。並べられたいくつもの冊子のその末端を手取る。開いたのは最も新しい思い出の束だ。

初日の出。初めての給料で両親にご馳走したお寿司。晴れ着に身を包む妹。父の昇格祝いに贈った少し高い日本酒と、それを抱いて涙する父。ローンを組んで購入した愛車。入社式に向かうスーツ姿の妹。そして、去年赴いた4人揃ったの家族旅行。

その日の夜のことは、よく覚えている。温泉に浸かった後、部屋へと戻りお酒を飲みながら寛いでいた私たちに、お土産を見てくるとそう告げて両親は2人で出掛けて行った。並ぶその背中に、ぽつり。お父さんとお母さん、仲良いよねえとそう妹は小さく溢すと

「わたしもね、今の彼と、あんな風になれたら良いなあって思っているの」

と、そんな言葉を続けた。向けた視線の先にはほんのりと頬を赤く染めた妹。広がる赤の

原因がお酒だけでないことは、その妹の表情が物語っている。

どんな人なの？と尋ねた私に、妹は携帯電話を取り出して少し前の休日に出掛けたという旅先での写真を見せてくれた。新幹線で食べたお弁当、キャリアケースとその日のコーデ。観光地の風景、その土地の名産品。ゆつくりと画面をスクロールしていく中、妹が1人で写っているものがいくつか目に留まった。画角的にこれらは『彼』が撮影したものなのだろう。そつとその写真に指を伸ばす。画面いっぱいに写った妹の姿に思わず、私は、息を呑んだ。

「彼ったら変な写真ばかり撮るんだよ」

すぐ隣から聞こえてきたその声に、咄嗟に反応を示せない。

私には自負がある。今までの人生で妹と一番長く過ごしてきたのは私だという自負が。一緒に居たのは、すぐ隣で見守ってきたのは私だという自負がある。ああ、それなのに。

疲れ果てホテルのベッドへ倒れ込む妹、ハンバーガーに食らいつこうと大きく口を開けた妹、強風に煽られ前髪が激しく乱れた妹。垣間見た思い出のほんの一瞬。『彼』によって切り取られたその瞬間が、私の目にはとても

「…お姉ちゃん？」

どうかした？と私の顔を覗き込む不思議そうな表情に私は答える。

「素敵な人だね」

私のそんな言葉に妹は驚いたようにその瞳を大きくさせると

「…うん」

うん、そうなのと呟いて柔らかく、微笑んだ。向けられた妹のその笑みに、私はもう一度手の中の端末を見つめる。可愛い。可愛いな、とそう思った。その写真を前に思わず私も小さく笑う。私はこの日初めて、愛が目で見えることを知った。

ゆつくりとページを進めていく。忘年会で貰ったお肉。並んで台所に立つ母と妹。両家顔合わせ時の集合写真。ゴルフバッグを背負う父。引越しの前夜、私のベッドに忍び込んできた妹。お姉ちゃんは寂しくないの？と唇を尖らせる妹とその日は夜通しお喋りをして、次の日うつかり会社に遅刻しそうになった。妹の新居で育てられている野菜。見慣れない食卓の上に並ぶ見覚えのある家庭料理。少しずつ増えていく、私の知らない日常の切り取り。

アルバムの最後のページまで目を通し終えた直後、グブツと机の上で携帯電話が揺れた。画面に写し出されているのは妹の名前。明日はよろしく願います、なんて妙に畏まったメッセージと共にそのアイコンが目に残まる。記憶にあるものとは違うその丸い切り抜きに、ふと指を伸ばした瞬間、私は妹と交わしたあるやり取りを思い出した。

「これはわたしの誕生日をお祝いしてくれた時のもの」

この子は彼の実家で飼っている猫、こっちは少し前に初めてボルダリングに挑戦した時の写真、と携帯電話を片手に妹の口から語られる『彼』との日々。良い写真はかりだね、とそう素直な感想を漏らした私に

「…うん」

うーん、と妹は悩ましがげな声を上げた。良い写真、ではあるんだけどと少しずつ弱まっていくその語気。思わず小さく首を傾げた私に妹は

「わたしは、お姉ちゃんの写真の方が好き」

なんて、そんな言葉を紡いだ。

その手の中の画面を覗きこみながら私は言う。

「…変な写真ばかりを撮るから？」

ケーキの上の蝋燭を吹き消すのに苦戦している妹、毛を逆立たせた三毛猫と対峙する妹、足を滑らせ壁から落下しかけている妹。並んでいるその写真を前に、妹は苦笑いを浮かべながら首を横に振るった。そして

「これと、これと…あと、これ」

フォルダの中からいくつかの写真を抜粋して見て！とその画面を私へ向ける。そこに写し出されているのは、妹。テレビを覗ながら両親と笑っている妹、お気に入りのマグカップを手にはリビングで本を読んでいる妹、扇風機の前で涼んでいる妹。どれも見覚えのある風景だ。

「わたしのお気に入りの写真なの」

自分で言うのもあれなんだけど、このわたし凄く盛れてない？と妹は照れたように頬を掻く。今、妹が選んだその写真は

「全部、お姉ちゃんが撮ってくれたものだよ」

妹はそう口にして、笑う。

「なんだろう写し方…画面への収め方、なのかな？」

お姉ちゃんが撮ってくれたわたしって不思議と凄く可愛く見える、可愛く見える気がするの、と妹は続けると

「だから私はお姉ちゃんの写真が、お姉ちゃんの撮ってくれた写真が好き」

彼には内緒ねとそう言ってその白い歯を覗かせた。

触れた、アイコン。大きく写し出されたその写真を前に、よし、と私は声に出す。こちらこそよろしくお願ひします、そんな文字を打ち込んで送信。勢いよく立ち上がり、リビングで寛いでいる両親へ向けておやすみなさいとそう告げる。え、もう！？と上がる驚嘆の声に、私は笑いながら自室へと足を進めた。

明日は、妹の結婚式だ。新調したばかりのカメラを手に取って充電残量を確認。もう一度小さく、よし、と呟いてベッドへと潜り込んだ。

瞼を閉じて、ウェディングドレスの妹とその横に並ぶ『彼』の姿を思い浮かべる。結婚式という大切な晴れの日。掛け替えのない1日だからこそ万全の体調で臨みたい、だって。明日、そう明日だけは。その式場で妹を1番可愛く撮ることができるのは、他でもない私なのだから。